

論文

古代ギリシア世界とニワトリ —ニワトリの図像に関する考察—

玉本 濬*

序

古代から、人間の生活には常に家畜の存在があった。産業動物、あるいは愛玩動物として発展してきた代表的なものはイヌ、ウシ、ウマ、ブタ、ネコなどの哺乳類と、アヒル、ウズラ、ガチョウ、ニワトリなどの鳥類である。

現在も彼らにはそれぞれ人間から与えられた役割があり、本稿で扱うニワトリにも、採卵、食用、闘鶏などの競技といった役割がある。しかし紀元前のギリシアやローマにおいて、ニワトリ（多くの場合はオンドリ）の役割は現代よりも更に広範にわたっていた。すなわち、採卵、食用、時をつくること、少年愛での贈り物、闘鶏、神への犠牲、占い、の7つである。このようなニワトリの役割については多くの文献や図像が存在している。その資料を1章にて詳しく分析していくと、8つの役割「魔除け」が存在しているように思われた。2章以下ではこの役割を、古代地中海世界における「魔除け・邪視除け」の様々な品との関連から明らかにし、古代ギリシア世界を生きた人々がどのような視点でニワトリを見ていたのかということ、そしてそのニワトリと「ファロス鳥」の関わりについて考察してゆきたい。

第1章 ニワトリの伝播経路と役割

ニワトリの原種はインドから東南アジアにかけて分布するセキショクヤケイとされ¹、家畜化が始まった時期は紀元前3000年頃と考えられている。インダス文明（紀元前2300-1800年頃）の栄えたモヘンジョ・ダロで骨や、ニワトリを表現した印章、粘土像などが発掘されている。

紀元前15世紀前半、第18王朝5代王トトメス3世の時代に、ニワトリは海路で

* 東海大学大学院文学研究科文明研究専攻博士課程前期

インドからエジプトへ渡った。毎日卵を産むニワトリについての記録が残っているため、採卵のために飼育されていたと考えられる。また、ツタンカーメン（12代、1347-1338年）の墓所にニワトリの絵が描かれた陶器が残っていたが、これが宗教的意義を持っていたのかは不明である。

次にニワトリが渡ったのはペルシアであった。紀元前1000年頃に火を崇拜するゾロアスター教と出会ってからは、太陽が昇ると鳴き出すニワトリは神格化された。また、ミトラ（司法）の共同体を神格化したスラオシャ神の象徴動物もニワトリである。スラオシャ神はニワトリを伴い、信者たちを呼び覚まして宗教的義務に就かせることを役目としていた²。

ペルシア海からカスピ海、黒海を経てギリシアへ到達したのは紀元前9世紀頃であった。ここでニワトリはペルシアを経由したために「ペルシアの鳥」と呼ばれる³。

その後ローマに入り、ローマ帝国の繁栄と共にニワトリは実用的な家禽、搾取の対象となっていました。

紀元前9世紀にギリシアへ到達したニワトリは、様々な文学作品や芸術作品に登場し、その役割を現代へ伝えている。本章では7つの役割を取り上げる。まずは実用的な用途から見てゆこう。

1. 採卵

アイソーポス『イソップ寓話集』の「女と雌鶏」⁴に毎日卵を産むニワトリが登場する。ニワトリの祖先とされているヤケイは、年間で30～60の卵を産む⁵。現在の卵用鶏として改良を加えられたニワトリでは年間最高365個という記録もあるが、アイソーポスの時代では考えられない数字だ。生産率の高いメンドリは夢のような宝であったのだろう。この寓話に登場するメンドリの飼い主の女は、さらに卵を産ませようと餌を大量に与え、メンドリは丸々と太り、それきり卵を産まなくなってしまう。

アリストテレス（前384-322）の『動物誌』『動物発生論』でも卵に関する記述が成されている⁶。彼は「高級種（純系）の方が低級種（雑種）より多産でない」⁷と記述している。多産なニワトリを作るためには人為的な交配を行っていたかどうかをここから読み取ることはできないが、採卵を行うための観察が積極的になされていたことは推測できる。

2. 食用

ギリシアでの「立派なオンドリ」の価格は、およそ1羽で5～10ドラクマであった⁸。1ドラクマ（ドラクメー）で一家が2～3日生活できた⁹ため、ニワトリ 자체は市民にとって食べ物の価格ではなく、もし食べるとしてもメンドリは卵を産まなくなるまで飼育され続けたと考えられている¹⁰。こうした価格の問題からギリシア時代¹¹においてニワトリを食用としていた記述は見つからないが、ローマ時代¹²に入ると、饗宴の場などに登場するようになる。

アテナイオス（後200年頃）は『食卓の賢人たち』で次のように述べている。「南瓜や刻んだ野菜について鶏が出てくると、ミュルティロスが言った、『ここに山ほどの鳥が出されたが、今の習慣では、鶏、それも雌の鶏だけを *ornis* と言って、（哲学者のクリュッポスが『快楽および善について』でこう書いている、『ある人々は白い鶏は黒い鶏よりも美味であると思っている』）雄の鶏のことは *alektryon* [雄鶏] と言うんだな。しかし昔の人は、雄であれ雌であれ、また鶏以外の鳥であれ、鳥ならば *ornis* と呼んでいた。特定の鳥だけじゃないのだ』」¹³。この時代では羽色による鶏肉の味の優劣が議論の対象にまでなっている。また、プリニウス（後23-79）はニワトリによって豊かになっていく食卓事情を批判的な目で見ていて、「『博物誌』の中で「デロスの人々は雌鶏を肥育することを実行し始めた。そのためそれ自身の肉汁で照り焼きにされた肥えた鶏肉を貪り食うという有害な習慣が始まった」」¹⁴と述べている。

3. 時をつくる

夜明けと共に鳴きだすニワトリは、一日の始まりを知らせる役割を担っていた。アリストパネス（前445頃-前385頃）の『鳥』にその様子が記されている。「雄鶏は誰より早く、ダーレイオスやメガパゾスよりも早くペルシア人たちを支配し、独裁者となったので、その結果、今なおその時の支配の名残でペルシアの鳥と呼ばれている。それゆえ、今でも、ペルシア大王のように、鳥たちの中ではただ一種、頭上にぴんと立った帽子をかぶって歩き回っている。このようにかつては力があり偉大で幅を利かせていたので、今でもなおその時の権威によって、ただの一声かん高く歌い上げると、誰もかもが飛び上がり、仕事に取り掛かる、鍛冶屋、陶工、革なめし職人、靴屋、風呂屋、精麦業者、竪琴製作兼盾製作職人が。またあるものはサンダルを履き、まだ夜明け前なのに、歩いてゆく」¹⁵

プリニウスもまた、規則正しく時をつくるニワトリが日の出前から鳴きだすと記した。「（クジャクと）ほとんど同じくらい誇り高くまた自覚をもっているのがわが

ローマの夜警、自然が人間どもを起して仕事に就かせ、眠りを遮る目的で準備してくれた鳥の種類だ。彼らは練達した天文学者であり、日中はそのうたで三時間ごとに仕切りをつけ、太陽とともに床に就き、そして第四野営見張時（夜明け前のこと）にわれわれを仕事と労働に呼び戻し、目の覚めていないわれわれのところへ陽が射し込むことを許さず、歌でもってその日の先触れをし、一方翼を両脇にばたばたと打ち付けて歌そのものの先触れをする」¹⁶

4. 神に捧げる犠牲

古代ギリシアの犠牲については、文学作品等ではウシ等を捧げていた描写がある¹⁷が、実際はそれよりも安く手に入るヤギ【図1】やブタなどを捧げていたと考えるのが現実的であろう。プリニウスは『博物誌』で「彼らの体の内部、臓腑にいたるまでが、もっとも高価な生贊と同じくらい神々のお気に召す」¹⁸と述べており、ニワトリが安価な犠牲のひとつとして用いられていたことを示している。

ニワトリがギリシア世界に到達した紀元前9世紀頃、ギリシア神話の体系はほぼ完成した後であったため、「ゼウスとワシ」「ヘラとクジャク」「アテナとフクロウ」（【図2】）のような、「特定の神=特定の動物（鳥）」の組み合わせはニワトリには成立しなかった。そのかわり、壺絵ではエロース、アプロディテ、豊穣の神プリアポスなどの生殖・性愛に関わる複数の神々の図像にたびたび登場している。ニワトリと生殖の関連については後述する。

プラトン（前428/427-348/347）は『パайдン』において、師ソクラテスの臨終の様子を次のように伝えている。「すでに下腹のあたりは、ほぼ冷たくなっていました。そのとき、ソクラテスは顔に覆布がかけられてあったのですが、それをとっていわれた。そして、これがあの方の口からもれた最後の言葉となつたのです。『クリトン、アスクレピオスに鶏を一羽おそなえしなければならなかつた。その責を果たしてくれ。きっと忘れないように』」¹⁹ただし、これ以外にアスクレピオスにニワトリを捧げる記述は見つからず、この神との直接の関連は不明である。

5. 占い

未来に起こる出来事を知りたい時、人々は神に答えを求めることが多かつた。アポロンによるデルフォイの神託等がその代表例であるが、一方で、動物の行動を観察することで未来を占うという方法も存在した。その観察対象のひとつとしてニワトリが登場する。

キケロー（前 106-43）は自身も 15 人で構成される鳥卜官に選ばれた経験があり、著作『神々の本性について』や『占いについて』で何度かニワトリを用いた占いにまつわる事例を取り上げている。第一次ポエニ戦争²⁰が起きた際、執政官であったプリウス・クラウディウス・プルケルは出陣前にこの占いを行った。ニワトリの前に餌をまき、そのついばむ勢いが良ければ吉兆、悪ければ凶兆とする占いで、戦時の慣例行事でもあった。従軍していた鳥卜官はニワトリの餌を何日間か抜き、占いの結果が必ず吉と出るように工作するのである。しかし、この時に限ってなぜかニワトリは餌をついばもうとしなかった。プルケルはこれに怒り（あるいは冗談半分で）、「食わぬなら飲むだろう」とニワトリを水に投げてしまう²¹。その結果彼は敗将となった、とキケローは記している。時の運もあったのであろうが、占いの結果を注視していた兵士たちの士気がプルケルの言動で著しく下がったことも、敗戦の一因と考えられている。彼の宗教を軽視した行いは厳しく咎められ、罰金まで支払うことになったという。

また、プリニウスもニワトリが鳴き声によってローマへ吉兆をもたらすと記している。「ニワトリはもっとも吉兆を与える鳥だ。これらの鳥は毎日わが国の役人たちを制御し、彼らにその家を閉めたりあけたりしてやる。ローマの職標を届けてやつたり保留したり、開戦を命じたり禁じたりして、全世界で得られたわが国のすべての勝利の前兆であった。これらの鳥は世界帝国の上にある至高の帝国を保持する。…彼らの鳴くのが遅れたとか、夜鳴いたということまで前兆を含んでいる。なぜなら、一晩中鳴くことによってボエオティア人に、スパルタ人に対するあの有名な勝利（前 371 年のレウクトゥラの戦い）を予言したものと推測され、その兆が解釈された。というのは、（闘鶏で）征服されるときはこの鳥は鳴かないから」²²。

日本では、このように日の昇らぬうちからニワトリが鳴きだすことを「宵鳴き」と呼び、凶兆として嫌う傾向がある。しかしほう人は鳴く時間帯に関係なく、ニワトリそのものが吉兆を呼び込む鳥であると認識していたようである。そのためニワトリは占いの場面において重宝されていたようだ。

6. 少年愛での贈り物

少年愛とは、地中海地域に存在した独立都市国家において、年長の男性と年少の男性との間に存在した同性愛関係を指す語である。役割にはそれぞれ名称がある。まず、年長の側=愛する男は「έραστής エラステース」である。年少の側=愛される少年は「παιδίς パイス」または「έρωμενος エローメノス」と呼ばれる。闘鶏にお

いて敗者となったニワトリは奴隸と呼ばれること²³と、「παις パイス」²⁴という呼称は人間の奴隸（δοῦλος ドーロス）に用いられていたことをも記憶に留めておくべきであろう。

自由身分の少年は、時を経ると都市国家の一員としてその運営に携わる人材になるため、社会的に保護されていた。よって彼らを年長者が暴行することは許されず、年長者は少年を誘惑の言葉や贈り物で口説き落とさねばならなかつた。例えば、アリストパネス（前445頃-前385頃）が喜劇『鳥』の中で「男が（少年に）与える鳥はウズラであつたり、セイケイであつたり、ハイイロガンであつたり、ペルシアの鳥にする男もいる」²⁵と書いており、様々な種のひとつとしてニワトリが登場している²⁶。

贈り物にニワトリが好まれた理由は何であろうか。これは少年愛で抱かれる側の未成年から抱く側の成人への移行期にある少年たちが、オス同士の競争において勝者／敗者となるニワトリと共に通する性的な両義性を持っていたためと考えられる。年長の男性がニワトリを贈る時、これは少年の気を引くだけでなく、年長の男性の性的意図に抵抗し続けるよう少年に求める役割もあった²⁷。

少年愛において、当事者たちの立場や感情・快楽の比率は決して平等ではない。クセノフォンは「少年は大人に対して、婦人のように性交の愉悦をともにすることはないのであって、むしろアプロジテ（αφροδίτη 愛欲）に酔うものをしらふでながめる」²⁸と語り、プラトンも、少年が年長の男性に服従することで得るものの中に肉体的快楽はないという趣旨の発言をしている²⁹。逆に、もし愛される側が快楽を得るようなことがあれば「これらの人々の身体が自然に反した仕組をもっている」ということである。…このような人間は女性になりうる」³⁰とアリストテレスは語る。被支配に従順になることは、死や奴隸化と同等の意味を持っていた³¹。

アリストテレスは「メンドリのいない群れでは、古参のオンドリが新入りのオンドリに乗りかかる」といった記録を残しており³²、この鳥が男性的要素と女性的要素のどちらにも転がる可能性があることを示している。これについては闘鷄の項で後述する。

壺絵にも贈り物としてのオンドリが描かれたことがあった。【図3】はゼウスがトロイアの王子ガニュメデスを誘惑している場面である。ガニュメデスは右手に輪回し遊びにつかう道具を持ち、左手にゼウスから受け取ったと思われるオンドリを持っている。また、【図4】でもガニュメデスを誘惑する若い男神が描かれているが、彼はゼウスのアトリビュート³³である長い杖ではなく、ケーリュケイオン（カドウケ

ウスとも呼ばれる伝令使の杖) と翼のあるサンダルを身に付けた伝令の神ヘルメスである。彼はゼウスの代理として誘惑の役目を務めていると考えられる³⁴。神話で伝えられるところでは、ゼウスはワシに変身してガニュメデスを誘拐する、または使者であるワシに命じてガニュメデスを誘拐させるなどしているため、オンドリを贈る場面は記されていない³⁵が、少年愛という文化の影響を受けたためこうした壺絵が残されたと推測できる。壺絵に描かれるニワトリの大半はオンドリを扱ったものだが、わずかながらメンドリが描かれたものも存在する。メトロポリタン美術館のキュリクス ([図5]) がその代表例で、これを作った人物と思われる者の名が記されている³⁶。

年長者から贈られたオンドリ（あるいはメンドリ）を少年たちが受け取った後どのように扱ったのかについては記述がないため想像の域を出ないが、オンドリの場合は後述する闘鶏に用いたのではなかろうか。

7. 闘鶏

現代もスポーツや賭け事の対象として存在する闘鶏であるが、始まりはギリシアにあるとされる。アイリアノスによると、アテナイの政治家テミストクレス（前 528 頃 - 462 頃）はペルシア軍との戦闘を控えたギリシア軍に対して戦うニワトリを示し、彼らを鼓舞したという。そして勝利の後、この出来事を称え、公的な行事として毎年一回闘鶏を劇場にて催すように定めた³⁷。また、プラトンは『法律』で、アテナイの人々が闘鶏に熱中する様子を伝えている。「わたしたちのところ（アテナイ）では、子供だけでなく年のいったものまでが、互いに闘わせるために鳥（ニワトリとウズラ）を育てています。彼らはそのような動物の訓練として、それらをけしかけて闘う練習をさせるお互い同士の運動だけで、十分であるとはけして考えていません。それに加えて、めいめいがそれらの雛を持って、つまり、小さいものは手のなかにいれ、大きいものは小脇にかかえて、自分の身体の健康のためにではなく、それらの雛鳥の健康のために、何スタディオンも歩き回るのです」³⁸

壺絵にも闘鶏に興じる人々の姿が描かれた。闘鶏を行う人物像は成人男性であることもあるが、多くの場合ではまだ髭も生えそろわぬ若者たち（つまり前述した少年愛において愛される側）である。その身体の描写は両性具有的で、やがて翼を生やし、エロースとして描かれることにより「闘鶏をする少年」として他の少年の図像から識別された³⁹。

エロースは若者として描かれるギリシア時代の作品と、子供として描かれるロー

マ時代の作品に分かれるが、そのどちらにもオンドリは登場し続ける（[図6] [図7]）。当時の人々がオンドリ（闘鶴）と性愛を関連付けて認識していたことは否定できない。

第2章 ニワトリとファロス鳥の関連

壺絵の中に奇妙な姿をした生物が描かれていることがある。胴体は哺乳類や鳥類のそれだが、頭部などが男性器に置き換えられているものである。これをファロス動物、ファロス鳥などと呼ぶ。共通しているのは「動物の身体」と「男性器型の頭部」の二点で、その他の様相は、人間より大きいものや小さいもの、睾丸の有無、脚部の有無、翼の有無、亀頭部分に目玉が描かれたもの、頭部以外の男性器型パートの有無など、個々でかなり異なっている。本章ではそのファロス鳥の図像と、男性器などに与えられた魔除けの要素を扱う。

1. 図像

[図8a, b] は紀元前470年頃に作られたスキュフォス（酒盃の一種）である。片面には翼を畳んだ小さなファロス鳥と腰を屈めたサテュロスが、もう片面には翼を広げたファロス鳥が大きく描かれている。双方とも睾丸、脚部、翼、亀頭部分の目玉が全て描き込まれている。サテュロスと比較すると、このファロス鳥は小鳥のような大きさを想定して描かれたものであろう。[図9a, b] は紀元前6世紀に作られたスキュフォスの表裏に描かれたファロス鳥である。双方とも睾丸と翼はあるが、脚部が省略されており目玉もない。種類は不明であるが、身体の長い鳥がa面には1羽、b面には2羽描かれている。この鳥と比較すると、ファロス鳥は身体がぼつてりと丸く肉厚に見える。[図10] には巨大なファロス鳥が画面いっぱいに翼を広げ今にも飛び立つような様で描かれている。目玉や翼は細かく描き込まれているが、睾丸は背中に乗せた女性の足で隠されているため確認することはできない。女性とファロス鳥の関係については後述する。例外的に、口が描かれたファロス鳥も存在する。[図11] のファロス鳥は身体の大半が欠けているものの、鉤爪のついた足と口元が描かれている。これにも女性が描かれており、ファロス鳥は首を伸ばして舌を突き出し、女性とキスしようとしている。この口は鳥の堅いクチバシとは異なり柔らかく描かれている。

ファロス動物／鳥は壺絵の他に、ティンティナブルム⁴⁰と呼ばれる銅製のネックレ

スや軒先に吊るすランプなどにも利用された。ティンティナブルムは邪視や悪運を遠ざける魔除けとして用いられたと考えられている⁴¹。【図12】は男性器型の頭部と尾に、哺乳類の脚部を持つ動物が用いられている。【図13】の仰向けになった動物をナイフで攻撃する男のように、直接男性器を描くことなく、ヒツジやライオンなどでその代替を行ったものなども代表例として挙げられる。【図14】はその一種である。翼の先などに鈴を下げていたであろう鎖が残っている。【図15】は脚部のあるファロス鳥の鋳型である。尾羽の部分と睾丸がない代わりに男性器が配置されており、頭部と合わせて3本の男性器を有している。

2. ファロス鳥はニワトリか？

ファロス鳥は男性器型の頭部と鳥類の身体との合成によって生まれた表現だが、この身体部分は一体何の鳥をモチーフにしたのだろうか。候補としてはニワトリとハクチョウが挙げられる。

ジョン・ボードマンはファロス鳥を、ニワトリよりもハクチョウに近いと論じている。

“The usual body type is long ovoid with a very short tufty tail. In these respects it exactly resembles the artists' rendering of swans, and we must conclude that the artists conceived it as a deviant swan. It is often assumed, and hotly argued by Hoffmann, that the bird part is that of a cock but, however it may be treated in later years, in our period it never displays the characteristic cock's tail feathers, nor are its legs spurred.”⁴²

ボードマンの根拠のひとつに、ファロス鳥とニワトリの身体的特徴が異なる点が挙げられている。ファロス鳥は全体的に丸みを帯びた卵型の体型で、短くふさふさとした尾羽を持っており、ニワトリの特徴であるケヅメと尾羽は描かれていない。一方、実際に壺絵に描かれた【図16】に描かれたハクチョウと【図8b】のファロス鳥を比較してみると体型、尾羽の長さなど、共通する点を持っていることが分かる。またハクチョウは神話との関連が深いことも彼の主張をより強める一因となっている。特に、ゼウスはハクチョウに変身し、人間の娘レダを懷妊させて美女ヘレネラを設けたことで知られる。「レダと白鳥」⁴³と呼ばれるこの物語は古代においても後世においても壺絵や彫刻、絵画のテーマとして非常に好まれ、彼が牡牛⁴⁴や人間

の男⁴⁵に変身した物語とは比較にならない人気ぶりである⁴⁶。ハクチョウにまつわる物語にゼウスが真っ先に挙がることもあって、ギリシアにおけるハクチョウのイメージは非常に男性的である。アリストテレスのハクチョウに関する記述は「最もよく共食いをする鳥」⁴⁷といった優美さからは程遠いものであり、この力強さこそがファロス鳥の男性器型の頭部と結びつくのだろう。プリニウスも同様に「ハクチョウは肉食動物であって、互いの肉を食い合う」⁴⁸と記している。

ところが男性的なイメージとは逆の要素も存在する。エウリピデス（前484頃-406頃）によると、ゼウスはワシから逃げるハクチョウを演じてレダの胸に飛び込んだとされている⁴⁹。また、神話の印象ではレダの影に隠れてしまうことが多いが、ハクチョウに変身したゼウスの相手は復讐の女神ネメシスであったとする物語もある。ヒュギーヌス（前64頃-後17）によれば、ゼウスを追いかけたワシは彼に協力を頼まれたアフロディテであったという。そしてレダでの物語同様、ワシに追いかかれる哀れなハクチョウを演じてネメシスの胸元に飛び込み、まんまと思いを遂げたという⁵⁰。これらの物語ではハクチョウは弱い存在として書かれており、ゼウスはこれを欲望の隠れ蓑に用いた。レダ（またはネメシス）を油断させる意図があつてこの鳥を選んだのだとすれば、ハクチョウ自体に男性的要素があるとは明言できず、ファロス鳥との関連があると言い切ることもできなくなる。

ハクチョウの習性についても、ファロス鳥に似つかわしくない点が存在する。アリストテレスは共食いについて記してはいるものの、ハクチョウを「暮らしあは楽でたちも良く、子をいつくしみ、高齢に達する。ワシが戦いをしかければこれに防戦して勝つが、こちらから戦いをしかけることはない」⁵¹としている。この点がファロス鳥の男性器が持つ猥褻さや凶暴さと合致していないため、ファロス鳥とハクチョウの姿を意図的に似せたとは考えにくい。ただ多くの著述者たちにとって渡り鳥であるハクチョウの習性などを詳細に記録することはかなわなかつたらしく、ファロス鳥との関連をはつきりと否定できる確証が得られないことも事実である。

ハクチョウなど水鳥の外見的特徴である水かきの有無に関しては、（鑄造技術の問題もあるのか）ティンティナブルムで確かめることは難しい。また、壺絵で描かれる脚部はどうしても小さくなってしまうためほとんど描き込みがなされておらず、少なくとも上で扱った【図8、10、11】には水かきは見当たらない。【図10】の脚部に注目してみると、^{あしゆび}趾が折れて地面から少し浮き上がっている。これは木にとまつたり地面を活発に歩き回ったりする鳥の趾である。水鳥は水かきがあるため趾が真っすぐに伸び、地面と密着するため、このファロス鳥は水鳥ではないと考

えられる。このように、ファロス鳥の図像を見比べていると、ハクチョウと異なる様相のものが出てくる。

大英博物館所蔵のティンティナブルム【図17】は、長さ 8.2 センチメートルのかなり大ぶりなものである。右足にはトカゲ、左足にはオウディウスの語る「握った拳のまんなかに親指を出す仕草」⁵²をした人間の腕をしっかりと掴んでおり、その鉤爪や脚部全体のたくましさは猛禽類のそれと言つてよいだろう。

もうひとつの例はキュクラデス諸島の中心に位置するデロス島にある。ここは面積がわずか 3.6 平方キロメートルという、ほとんどの地図には載っていない岩の塊のような島だが、アポロンとアルテミスの生まれ故郷として名前は広く知られている。アポロン神殿の他、アポロン・アルテミスの母であるレトの神殿や、ゼウスの妻ヘラ、ヘレニズム時代に東地中海で盛んに信仰されたエジプトの女神イシスの神殿なども建設された。キュントス山の西側には紀元前 300 年頃にカリュスティオスなる人物が建てたディオニュソス劇場がある。ここは約 5500 人の観客を収容できた⁵³。現在のデロス島は人口がほぼゼロであるが、建設当時は多くの人々が生活を営んでいたことが分かる。劇場の入り口に建つのが 2 本の石柱である。両方とも上部に巨大なファロス像が据えられ、一方には柱部分に大きくファロス鳥の姿が彫られている（【図18】）。このファロス鳥は壺絵などで見られる横から見た姿ではなく、正面から見た姿を描いたものである。壺絵師や職人たちが神々の顔やメドゥーサなどの魔除けのモチーフ⁵⁴を顔の真正面から描き、通常は横顔で描かれることが多い他の人物像と明確に区別することで、見る者の視線を奪う効果を与えた⁵⁵。このファロス鳥も同様に正面から描かれているため、尾羽などがどのような形態をしているのかは分からない。しかし脚部の内側にはケヅメがはっきり刻まれており、このファロス鳥の胴体と脚部がキジ目の鳥を想定して製作されたことは明白である。同じキジ目であるクジャクは女神ヘラの聖鳥であり、ディオニュソス劇場に設置された石柱に彫刻するとは考えにくいため、このファロス鳥に限っては、ニワトリをモチーフにしたと断言できるだろう。

このように、ファロス鳥は描写がその時々によって異なるため、身体的特徴だけでモチーフとなった鳥の種類を特定することは困難である。ジョン・ボードマンがハクチョウ説を唱えた際「レダと白鳥」などの神話的要素を取り上げたように、ニワトリにもファロス鳥と関連する身体的特徴以外の要素があるのではなかろうか。それを探るためにには、まずファロス鳥がどのような目的のために作られたのかを知る必要があるだろう。

3. 邪視

邪視という考え方がある。これはある人物の目が見たもの（人、家畜、農作物など）に禍が降りかかる現象、またはその現象を起こす者を指す言葉である。英語では *evil eye* と言い、日本での訳語は邪視の他に、悪魔の目、魔眼などがある。邪視が顕著にみられるのは中近東、南アジアなどであり⁵⁶、地中海地域においてもこれらを避ける魔除けの護符が数多く出土している。文献にも邪視の存在や、そういった魔術への恐怖心を匂わせる文章が現れている。ホメーロス（前8世紀頃）の『オデュッセイア』で、オデュッセウスの息子テレマコスが父の館に居座る略奪者たちを批判し、ゼウスの加護を祈る場面が最も古い言及であろう。テレマコスの嘆きと祈りを聞いたゼウスは使いのワシを2羽飛び立たせ、ワシたちは略奪者たちの集まる集会所の真上から、彼らに向かって「眼を据えて、破滅の象を眼差しに見せ」飛び去ってゆく⁵⁷。この後、長い旅路を経て故郷へ辿り着いたオデュッセウスが宮殿に現れる。略奪者たちは彼に武器を取り上げられ、オデュッセウスだけが引くことのできる大弓で一人残らず射殺された。またエウリピデスの『オレステス』においても、父の仇打ちのために母を殺したオレステスは狂乱に陥り、「ひややかな眼ざし」⁵⁸ 「毒のある目」⁵⁹で周囲の者たちを恐れ慄かせた。

その他、アリストテレスは『問題集』でこの現象に対抗する効能を持つ植物に言及している。それによると、芸香（ヘンルーダ。ミカン科の多年草）を食べるとこれが身体を温め、暴食などで発生する悪い氣息が身体に留まらぬようにし、体調不良を防ぐ。結果的にそれが呪い⁶⁰から人を救っているように見えるため、芸香は呪いを解く薬だと言われるという⁶¹。

こうした薬効に頼っても邪視を恐れる人々は存在し続けた。アレクサンドロス大王以降も、邪視を持つ者の存在に関する記述は後を絶たない。ウェルギリウス（前70・前19）の『農耕詩』に登場する牧人は、歌競べの掛け合いの中で「まったく僕の（家畜）は、骨と皮ばかり。それも愛が原因なのではない。誰かの眼が、僕のか弱い子羊たちに呪いをかけているのだ」⁶²と、恋煩いではなく邪視のために家畜が弱ることを嘆いている。オウィディウス（前43・後17）の『転身物語』では、テルキネスという「眼にふれたものを一瞥で殺してしまう魔力」をもった一族がかつて住んだ町に言及する場面がある⁶³。

プリニウスも同様に、魔力のある目を持つ人々について記録している。「トゥリバリ族とイリュリア人の中に同じ種類の人びとがいて、これがまた一睨みで魔法をか

け、彼らが長いこと、とくに怒りの目つきで見つめていることで人びとを殺す。こして彼らの兇悪な眼は大人にきつく作用する。…アポロニデスも、スキタイにいるビティアエと呼ばれるこういう種類の女性について報告しているし、フェラルコスも、ポントスにいる同様の性質をもったティビイ族と、その他多くの種類の女性について報告している」⁶⁴。

ギリシアの哲学者で著述家でもあったプルタルコス（46頃-120頃）は著作『モラリア』の中で「邪悪な目つきで魔法をかけ、災厄をもたらすと言われている人たちについて、…この事実の原因を究明できないから、この噂は信じられない、というのは不当で、原因を説明できなくとも、疑いもなく事実であることが、数知れぬほどあるのだ」⁶⁵と主張している。

人々は邪視を恐れると同時に、そこからもたらされる禍から逃れる術を習慣として身に付けていった。例えば、アリストテレスが記したように「動植物から作った薬を用いる」、「手である仕草をする」などがあるが、今でも広く知られている方法は「魔除けの護符を身につける、または家などに飾る」であろう。

魔除けの護符の代表例として挙げられるのは、英雄ペルセウスに倒された怪物のメドウーサ【図19】である。その目に睨まれた者は石となる（あるいは石になつたかのように動けなくなる）という魔力を持っていたメドウーサだが、彼女はゴルゴン3姉妹の中で唯一不死でなかつたため、神々の力を借りたペルセウスによって首を切り落とされた。彼はこの首を用いて妻となるアンドロメダや母ダナエに求婚していた男たちを石にした後、首を女神アテナに捧げ、以降彼女の盾の中心にはメドウーサの首が飾られているという⁶⁶。このメドウーサの首を描いた壺絵や護符は数多く、時には柱やファサードなど、建造物の一部に用いられる場合もあった。そういった場合においても、メドウーサの首は外部からもたらされる災いを避ける役割がある⁶⁷。

特定の場所に設置する魔除けとして、ヘルメス柱像【図20】も挙げられる。これは道の交差地点や玄関先などに建てられた石の柱である。神々の伝令であり、旅人たちの守護者でもあったヘルメスの頭が上部に据えられ、ちょうどヘルメスの下腹部にあたる位置に勃起した男性器が彫られた。これを、領地を主張する目的で設置したのはペイシストラトスの息子ヒッパルコスで、当初はヒッパルコスの好みの文言を刻んだ一種の標識として用いられていた⁶⁸。この奇妙な石柱は時代を経ると信仰の対象となっていったようで、壺絵の中にもしばしば描かれ、供物を捧げたり、男性器部分に花輪をかけたりする人々の姿が添えられる場合もある。【図21】では

供物を持つサテュロスと男性の間にいる女性が、生け贋に捧げると思われるオンドリを抱えた姿で彫刻されている。ポンペイなどでは道路の曲がり角などに男性器のレリーフが飾られ、ふいの事故などから人々を守る役割があったと推察されていることもあり⁶⁹、ヘルメス柱像にも同様の意図が込められていた可能性がある。また設置場所が畠や家畜に関する場所ではなく、人家の寝室などに建てられるものでもなかつたため、これが豊穣を呼び寄せるものではないことが分かる。

メドウーサの首やヘルメス柱像、そしてファロス鳥に共通する点は、その奇妙な様相にある。なぜ古代ギリシア人・ローマ人はこのような奇怪な表現を護符に用いたのだろうか。

プルタルコスは「お守りが、その奇妙な顔つきで、視線を自分ほうに引き寄せて、その影響を受ける人々になるべく向かわないようにしてくれる」⁷⁰と語っている。醜い姿や卑猥な表現は、いつの時代も人の好奇心を搔き立てるものらしい。怖いもの見たさには蛇と牙を剥き出しにした醜女が合成されたゴルゴンのような怪物がふさわしく、ヘルメス柱像やファロス鳥には、男性器を描くことで見た者をぎょっとさせるような表現を与えた。一瞬で見る者の視線を奪い、その周囲にいる人間や家畜に邪視を向かせないようにすることが、これらの奇妙な護符の役割なのである。道路の交差点に建てられた像でも、首から下げたティンティナブルムでも、屋内に置かれた小さなカップでも、この視線を集めると効果は変わらない。メドウーサに関しては、その目にまつわる神話のために、単純に視線を集めるだけではなく、「邪視を持つ者を殺す、邪視を無効化する」という意図もあった可能性もある。ファロス鳥にも目が描き込まれる場合があるものの、こちらは大きさが小さく、壺絵の観察者である我々ではなく図像の中の人物たちへ視線を向けているため、単純にファロス鳥を生物として見せるための要素であると考えてよいだろう。

「卑猥さで邪視を除ける」という考え方の影響か、ファロス鳥は好色で名高い半獣のサテュロス、シーレーノスと共に描かれる場合が多い。今度は彼ら自身、そして彼らが仕える酒神ディオニュソスとファロスとの関係を見てみよう。

4. ディオニュソス祭とファロス

ディオニュソスはワインとそれによって引き起こされる狂乱を司る神である。ディオニュソス自身が千鳥足になって従者に支えられながら歩く場面が描かれることもあるが、露骨で下品とも取れる卑猥さは彼が引き連れている仲間によって付加されている場合が多い（[図22]）。マイナデスと呼ばれる女性信者と並んでディオニ

ュソスの従者として知られているのが、男性器を露出させ、時には勃起させたサテュロスとシーレーノスである。彼らはオルギアと呼ばれる音楽や舞踏の騒ぎ⁷¹に紛れてマイナデスを追いかけ回したり、性行為を行うこともあるので、愛の女神アフロディテやエロースなどよりも露骨な性的イメージが付きまとう。

多くの著述者が残したディオニュシア祭についての記述を読むと、ディオニュソスと男性器との関係の深さがわかる。ディオニュシア祭はその名の通りディオニュソスを奉る祭りである。アテナイでエラペーボリオーン月⁷²に行われたものを大ディオニュシア祭（または都市のディオニュシア祭）、アッティカ各地でポセイデオーン月⁷³に行われたものを田舎のディオニュシア祭と呼んだ。人々はワインの壺やイチジクの入った籠などを持ち、男性器を模した棒を掲げて行進した⁷⁴。こういった「ファロス運び」の様子は壺絵にも描かれた（[図23]）。ヘラクレイトス（前540頃-480頃）によると、行列をつくって歩きながら男性器に関する歌も歌っていたようだ。「隠し所を讃える歌をうたったりするのが、仮にディオニュソスを奉ずるためになかつたとしたら、破廉恥極まる所業だったことだろう⁷⁵」とまで言うのだから、その内容はよほどあからさまなものであったに違いない。アリストパネス『アカルナイの人々』の主人公ディカイオポリスは、家族と奴隸たちを引き連れてこの行進を行う際、ファロス（φαλλός）を擬人化し、パレース（φαλῆς）という名のディオニュソスの仲間として称えている⁷⁶。

また、デロス島のディオニュシア祭には、翼のついた巨大なファロスの像を海へ流す行事があった。木製のファロス像は山車に乗せて運ばれ、山車が海に沈む一方、ファロスは海を漂ってそのまま見えなくなる、という碑文が存在する⁷⁷。ファロスを海に流すというイメージは、クロノスが父である天空の神ウラノスを去勢し、その切り取ったものを海へ投げ入れたという神話に通じる。ウラノスの不死の肉片からは白い泡が立ち、その中からアフロディテが生まれたという⁷⁸。

アテナイのアクロポリスの南側はディオニュソスの聖域として発展し、その一角に17000人が収容できたと推測される巨大なディオニュソス劇場が建設された。劇場自体の歴史は紀元前6世紀にさかのぼるが、現存する大理石の客席は紀元前325年に政治家リュクルゴス（前390頃-324頃）が建設したものである⁷⁹。ここに設置された大理石の玉座には「ιερέως Διονύσου Ἐλευθερέως エレウテライ⁸⁰のディオニュソスの司祭の」と刻まれている⁸¹。その肘掛部分は2人の翼のある人物像が左右対称に配置され、彼らはそれぞれ頭の位置を低くして緊張状態にあるオンドリを手で支えている（[図24]）。ニワトリの眼前にも同じく頭を下げたニワトリが彫刻され

ていることから、これらが闘鶏の風景を描いたレリーフであることが分かる。アイリアノスの語った、テミストクレスが毎年の行事として制定したアテナイの闘鶏がこの劇場で行われていた可能性があるだろう。

5. 女性とファロス

サテュロス・シーレーノスと並んでファロス鳥の図像に頻出するのが、女性たちである。【図25】はふたりの着衣の女性が背中を向けあって食事の用意をしている場面を描いたキュリクス（盃の一種）である。ふたりの間に翼を広げ、首を大きく反らせたファロス鳥が配置されている。【図26】では裸の女性が小ぶりなファロス鳥を腕に抱えており、彼女の前に置かれた籠の中には、目のついた男性器が頭を覗かせている。

ファロス鳥と女性の関係について、ボードマンは以下のように述べている。

“As a disembodied expression of a woman’s sexual desires, as interpreted by men, the phallus-bird parallels the satyr who, in this period especially, seems to be the embodied expression of male sexual desires.”⁸²

ボードマンは女性と共に描かれるファロス鳥を「女性の性的願望が身体から切り離された表現」、サテュロスを「男性の性的願望の具現化した表現」であると考えた。

2章の少年愛の項(pp.5-7)で述べたが、少年愛における愛される少年とは異なり、異性愛における女性が性行為を楽しんでいたことは（男性の著述家によるものではあるが）明確に（そして誇張され）記述されている。喜劇作品の中にはオリスボス⁸³が登場することもあり⁸⁴、女性が性的快楽のために必ずしも男性を必要とはしていなかつたことが分かる。【図26】の籠から覗く男性器は全体像が見えないためオリスボスであると明言はできないが、【図27】ではオリスボスを手に持った女性が描かれており、ここにも籠に入った男性器の先端が見えることから、籠の中身も全てオリスボスとして描かれた可能性が高い。

女性器の描写についても触れておかねばならないだろう。女性器は図像で頻出する男性器とは異なり、イアムベー⁸⁵のアトリビュートとして両足を広げた極端な姿勢で表されるか（【図28】）、男性器を引きたてる脇役となる場合が多い。【図29】は女性が化粧品などを入れるために用いたピュクシスという容器の蓋に描かれたファロス鳥だが、その周囲三方向に女性器が描かれている。そもそも女性器を扱った品

自体の数が男性器のそれと比べると圧倒的に少なく、原因としては女性器が男性器よりも見えにくい位置にあること、陰唇や陰核などの細部が三次元では表現しにくいことなどが挙げられる⁸⁶。そのため女性器への関心が薄まり、女性の性的願望を男性の身体の一部で表すという奇妙な生物が発生したのだろう。しかし【図17】のような女性器を連想させる手の仕草が描かれる場合もあり、女性器が男性器と比べて魔除けやその他魔術的要素を持たないとは言い切れないようである。

6. ニワトリが持つ薬効

プリニウスの『博物誌』において、生殖に対するニワトリ（特にオンドリ）の薬効について言及がなされている。まず女性の妊娠期に効果があるものについて、「婦人が妊娠後、時々オンドリの睾丸を食べると、子宮の中で男の子が形成される」⁸⁷。この薬効については、後述するオンドリが持つ戦士のような闘争心を連想させる要素が影響していると考えられる。

また、男性の生殖能力について「オンドリの右の睾丸を一片の雄ヒツジの皮に包んで食べるとか、お守りとして付けるとかしても催淫剤になる」⁸⁸、逆に性欲を抑えるためには「闘鶏の睾丸にガチョウの脂を混ぜて擦り、雄ヒツジの皮に包んでお守りとしてつけていたり、またオンドリの血で擦り、どんなオンドリの睾丸でも床の下におく」⁸⁹と効果があるという。

また、それ以外の薬効についてプリニウスは「(ニワトリの)ひなどりの肉を裂き、それを暖めてヘビの咬傷にあてるとその毒を消す。またひなどりの脳を、ブドウ酒に入れて飲んでも同様だ。パルティア人は、メンドリの脳を傷に塗ることを好む。ひなどりのスープも、これを飲むとすばらしい治療薬であり、他の多くの目的にも不思議なほどよく効く。このスープをからだに擦り込んだ人には、ヒョウやライオンは触れない。とくにその中にニンニクが煮られた場合はそうだ」⁹⁰と記している。これは「野生動物のうちもっとも気高いライオンすらオンドリを怖れる」⁹¹という記述の影響を受けているのか、プリニウスやその周囲ではニワトリに猛獸の脅威を退ける効果があると認識されていたようである。またニンニクは闘鶏を行う際ニワトリに与えられた⁹²ため、ニンニクがニワトリの猛獸除けの効果を高めるとも考えられていたのかもしれない。

外敵を近付けないようにニワトリを用いる習慣は、豊穣の神プリアポスが担っていた役割と似ている。これはアレクサンドロス大王以降、急速にギリシア世界に広まった神である。酒神ディオニュソスとアフロディテ（あるいはニンフ）との間に

生まれた子で、父の従者としても知られる。最大の特徴はその巨大な男性器であり、精力や豊穣を司るだけでなく、庭園やブドウ園を荒らす害鳥や泥棒などを威嚇するための手段でもあった⁹³。【図30】のように男性器を巨大化させることによってティンティナブルムのモチーフにされていたことからも、ファロス鳥と同じ邪視を避ける役割もあったと考えられるであろう。プリアポスの犠牲獣はロバであるためオンドリとの直接の関連は不明であるが、【図31】のように、多くの供物と共にオンドリを捧げる人々の姿が描かれることもある。この図では右上の小さな人物像がプリアポスの彫像、その真下にいる女性が手にニワトリを持っている。

またアリストテレスが『動物誌』などでニワトリの多産性を記録していたことは2章の採卵の項（p.2）で触れたが、彼は交尾に関しても「(ニワトリは)あらゆる時期に交尾もし、産卵もする。…冬至の前後の二ヶ月以外は一年中である」⁹⁴、「ニワトリの雌は雄を追いかけ、雄が欲望を起こさないと、自分で雄の下に坐りこむ」⁹⁵といった様々な記述を残している。アリストテレスはニワトリの好色さの原因がある分泌物の偏りによるものとしている⁹⁶。彼の言う分泌物とは翼や羽毛、精液などを生じさせる物質のことで、これを翼の成長に使う曲爪類（猛禽類、よく飛ぶ鳥のこと）はあまり交尾をせず、精液を作るために使う重禽類（鶴類、あまり飛ばない鳥のこと）は頻繁に交尾をし、卵をたくさん産むという。このような性質がプリアポスと関連付けられた可能性もあるだろう。

非常にまれな例として、顔にオンドリのトサカと肉髯^{にくぜん}がついた男性像のティンティナブルムが大英博物館に所蔵されている（【図32】）。これは紀元後1世紀頃に作られたもので、右手に財布のようなものを握っているため、商売や盗人の神でもあったヘルメスをモチーフにしたものと考えられる。プリアポスが成立する以前はヘルメス柱像から着想を得ていたのか、ヘルメスを用いたティンティナブルムもプリアポスマチーフのそれと同様に多く製造されていた。オンドリを模した頭部は他のどのようなティンティナブルムにも見られない表現ではあるが、男性器とオンドリが直接的に関連付けられている貴重な史料である。

第3章 ニワトリの両義性

邪視と邪視に対する男性器の役割を見てきたが、次はニワトリそのものが持っていたと考えられる不安定な要素・両義性を検証しよう。アリストテレスが記した通り、ニワトリは多産性で知られていた。こうしたオンドリとメンドリの生殖行動だけ

なく、それに伴うオンドリ同士の争いと勝敗についても詳細な観察がなされており、これらがニワトリの持つ意味や役割に影響を与えていた可能性が高い。

1. 重装歩兵と若者

ギリシア・ローマの戦士は槍と丸盾を携えた重装歩兵が主であるが、その盾には様々な図柄が描かれた。アテナがメドゥーサの首が描かれた盾を持つように、重装歩兵もライオンやペガソスなどを描いた盾で戦地へ赴いた。その図柄のひとつにオンドリが存在する（[図33]）。ギリシアの作家ルキアノス（120頃-180頃）も『アナカルシスまたは体育について』の中で、闘鶏を行うことで若者の「魂に危険を求める熱情がおもむろに入り込み…勇猛心をかき立てられる」⁹⁷と記述していることから、闘鶏やニワトリに対して若者の精神面を鍛える効果を期待していたことが伺える。

前章で説明したように、ニワトリには「ゼウスとワシ」「ヘラとクジャク」「アテナとフクロウ」といった「特定の神=特定の動物（鳥）」という組み合わせが存在せず、神との直接の関連を示す記述は、ルキアノスの作品『にわとり』などでわずかに残るのみとなっている。『にわとり』はミキュロスという男が、オンドリに対して彼を心地よい夢から目覚めさせたと怒る場面から始まり、ミキュロスとオンドリとの間で掛け合いがなされるという内容である。ここでミキュロスがオンドリにまつわる神話を語る。戦争の神アレスの友人であった若者アレクトリュオーン⁹⁸は、この好色な神が女神アフロディテと不貞を働く間、アフロディテの夫ヘファイストスに露見しないよう周囲を見張る役目があった。しかし、ある時アレクトリュオーンは居眠りをし、夜明けと共に現れた太陽が不貞をヘファイストスに伝えてしまう。これによってふたりはヘファイストスに捕えられ、神々の前で晒しものにされた。アレスは役目を果たさなかつたアレクトリュオーンに怒り、太陽が昇るたびに鳴いて知らせるよう、彼をオンドリに変身させたのである⁹⁹。

ゼウスとガニュメデス、アポロンとヒュアキントス¹⁰⁰などのように、男神と美少年の物語は紀元前から数多く語られてきた題材であった。アレクトリュオーンに関する記述はこの作品以外では見られないためルキアノスの創作である可能性が高い。しかしオンドリの独特的なトサカ¹⁰¹は重装歩兵が被った兜に¹⁰²、ケヅメは彼らの武器にしばしば同一視された¹⁰³。ニワトリは闘争本能が強く、トサカや尾羽の高さといった派手な外見的特徴はメスを引きつけるだけでなく、他のオスに対して自分のテリトリーを主張する目的もある¹⁰⁴。特にトサカは、去勢を行った際に青白くなつて

しまうとアリストテレスが記しているように¹⁰⁵オスの闘争性の強弱と結びついてい
ると認識されていたようである。そういう性質から戦争の神であるアレスと関連
付けられた可能性もあるが、アレスの「友人」である「若者」を「オンドリに変身
させた」という書き方が、少年愛における贈り物＝ニワトリとの関連を思い起こさ
せる。アレスはこの若者と共に饗宴に参加していたと記されており、これはアレス
とアレクトリュオーンの間に少年愛が成立していたことを示す。アレスに愛される
少年 (Csapo の表現によれば「epicene youth 女々しい若者」¹⁰⁶) であったアレクト
リュオーンは、オンドリになることで重層歩兵すなわち成人男性へと変身したので
ある。

ファロス鳥も戦士の盾に描かれた。【図34】はトリスケリオンと呼ばれる三つ巴
の足模様とよく似た構図で描かれており、おそらく魔除けとして敵の攻撃を避ける
目的と、男性的で衰えを知らない力強さを示す目的とがあったのだろう。

2. その他の関連要素

オンドリの行動そのものから男性器を連想したという意見もある。Csapo は以下
のように論じている。

“The victorious cock was perceived as “phallicity” itself, swelling up, fluttering its wings, lifting its entire body, rising on tiptoes, stretching its head and neck skywards and crowing while gathering its wings into a ball. Greek art leaves no doubt that the cock, at its climactic moment, with its erect head and mobile lateral appendages, became a winged phallus.”¹⁰⁷

Csapo は勝った時のオンドリの仕草を好色さや好戦性と引き離すことができない
とし、勝った側が身体を膨らませ、羽根をばたつかせ、つま先立ちになって首を伸
ばし鳴く姿が、翼の生えた男性器を成立させたと考えた。その姿を「phallicity 男根
的性質」と記している。ファロス鳥はこのような翼をばたつかせる姿で描かれるこ
とが多く、【図8a】に描かれるような翼を畳んでいる姿は少ない。【図8a】ではフ
アロス鳥自体が小さく、サテュロスに対して委縮しているように見えるが、【図1
8】での神殿の入り口に陣取った石柱でも翼を畳んでいるため、(ファロス鳥がサテ
ュロスに虐げられているなどの) 消極的なイメージとして翼を畳ませているわけ
はなさそうである。翼を畳む際の明確な条件は不明だが、3章の図像の項で触れた

ように（p.8）、ファロス鳥には基本的に口が描かれない。このため、「鳴いているファロス鳥」と「鳴いていないファロス鳥」を区別する手段として翼の開閉が用いられたのかもしれない。

アリストテレスはニワトリのメスは鳴かず、オスだけが鳴くと考えていた¹⁰⁸。しかし、その習性はメスの状況によって変化する。「雌ドリも雄ドリに勝つと、雄ドリのまねをして時を作ったり、雌ドリに交尾をしかけたりするし、そのときや尾羽も高く上がる。雌ドリであることを識別するのは容易でなくなる。場合によっては一種のけづめが出てくることもある」¹⁰⁹。

メスがオスの外見に変化するように、オスも時と場合によりその役割を変化させる。「雄ドリでも、雌ドリが死ぬと、自ら雌ドリに代わって雛の世話をした」という例があり、あまりよく雛を導いたり育てたりするので、もはや時を作ったり、交尾をしかけたりしなくなつたくらいである。鳥の雄の中には生まれつき雌のような性質で、交尾しかけてくる雄に身を任せるほどのものもいる」¹¹⁰。この「雌のような性質」のオンドリとは、2章の少年愛の贈り物で触れた「戦いに負けた雄は勝った雄に従い、前者は後者によってだけ交尾を受ける。…雌ドリなしで雄ドリだけ奉納されている神殿では、当然すべての雄ドリが新たに奉納されたものに交尾をしかける」¹¹¹という記述に登場するもの是指している。オンドリが戦う様子だけでなく、ニワトリ同士の社会的地位の優劣までが詳細に観察されているのである。観察者たちはこうしたニワトリの社会に人間の社会をなぞらえ、闘鷄を行い、ニワトリを贈るという文化を築いていったのではないだろうか。

3. 両義性

これまでに取り上げてきたニワトリの性質を並べてみよう。まず、少年愛での愛する男／愛される少年、あるいは重装歩兵／若者、闘鷄における勝者／敗者、そしてそれによって起きるニワトリ同士での支配／被支配、メスがオスに／オスがメスに、ニワトリはこのどちらにも転がるあいまいな位置に存在している。

また、2章で見たように、ニワトリは夜明けと共に鳴き出す鳥である¹¹²。ここでも闇の世界と光の世界との境にニワトリが存在する。ホメーロスが『イーリアス』の中で英雄たちが命を落とす場面を、彼らの目を「闇が蔽つた」と記したように¹¹³、古くから闇は死の象徴であった。【図35】には冥府の王ハデスと妃ペルセポネの姿が刻まれている。ふたりの正面に立つのディオニュソスである。これはディオニュソスが自身の母セメレを取り戻すために冥府へ下りた場面¹¹⁴で、ハデスの手には

ペルセポネを地下世界に拘束するためのザクロ¹¹⁵が、そしてペルセポネの手にはオンドリが乗っている。ハデスのザクロがペルセポネ（そしてセメレなどの死者）に死（闇）をもたらす役割がある一方で、オンドリは彼女たちを目覚めさせ、光のある地上へ連れ戻す役として刻まれたのだろう。明言こそされていないものの、2章の神への犠牲の項（pp.4-5）で扱ったソクラテスの最期の言葉の意味も、アスクレピオスが病人・怪我人を死から救い出す医術の神であることや、死者を蘇らせた経験があること¹¹⁶と関連していたと考えることもできよう。

さらに、ニワトリは兵士たちの盾に描かれたことから、盾の内／外の間にも存在する。ファロス鳥も【図34】のように盾に描かれているため、盾に描かれたファロス鳥とニワトリは玄関先に飾られたティンティナブルムと役割が同じであり、双方とも敵＝邪視を持つ者への防御策として形作られたと考えられるのである。

おわりに

本稿では文学作品、壺絵、彫刻、ティンティナブルムといった資料から、ニワトリの持つ8つの役割、特にニワトリと男性器・ファロス鳥の関連を考察してきた。

ファロス鳥がニワトリから形成されたと明白に証明することへは至らなかつたものの、古代ギリシア世界を生きた人々が男性器に極めて高い関心を持っており、それをさまざまな形で図像化していたこと、また闘鶏には勝者／敗者に代表される両義性が認められること、さらにニワトリそのものの好戦的な性格が好まれていたことなどが、ファロス鳥を成立させるに至ったのではないかという可能性を示すことができた。邪視という見えない脅威に対抗するため、男性器に（安易に想像できる豊穣や多産といったイメージだけでなく）凶暴ともいえる攻撃的性質を見出したことが、彼らの関心と信頼度の強さを示している。ニワトリはその性質の表現に一役買ったのであった。

近現代においても、ニワトリはその容姿と鳴き声で人を魅了している。特に日本では薩摩鶏などの闘鶏用、尾長鶏・チャボなどの観賞用、東天紅などの声を楽しむ長鳴鶏という3つの分野に分かれた天然記念物17種とその他12種が「日本鶏」とよばれており¹¹⁷、日本鶏保存団体によって資質向上が続けられている。絵画の分野においては、江戸時代中期に京で活躍した画家伊藤若冲（1716-1800）が、多くのニワトリを描いたことで知られている。また、白色レグホーンやプリマスロックなどの種は生産する卵と肉とで食生活を豊かにしている。これらは家畜化のはじまりか

ら數え切れないほど繰り返されてきた、人間の手による品種改良と飼育管理のたまものである。

他の家畜と比較しても、これほど精神的・物質的に生活を豊かにする動物は見当たらない。古代地中海世界においてニワトリが担っていた役割は多岐にわたり、アリストテレスやプリニウスに代表される多くの著述者の関心がニワトリに向かっていたことからも、ニワトリと人間の親密さが感じられる。とりわけ、都市国家を支えた重装歩兵や、将来重装歩兵となるであろう少年たちがニワトリの闘争性と深く結び付き、人間社会における文化的な役割を担う動物として、彼らの生活に組み込まれていたことが分かった。

テキスト

- アイソーポス（中務哲郎訳）『イソップ寓話集』（岩波文庫、1999）
アイリアノス（松平千秋・中務哲郎訳）『ギリシア奇談集』（岩波書店、1989）
アテナイオス（柳沼重剛訳）『食卓の賢人たち3』（京都大学学術出版会、1998）
アポロドーロス（高津春繁訳）『ギリシア神話』（岩波書店、1953）
アリストテレス（島崎三郎訳）『動物誌』（『アリストテレス全集7』、岩波書店、1968）
アリストテレス（島崎三郎訳）『動物誌 下／動物部分論』（『アリストテレス全集8』、岩波書店、1969）
アリストテレス（島崎三郎訳）『動物発生論』（『アリストテレス全集9』、岩波書店、1969）
アリストテレス（戸塚七郎訳）『問題集』（『アリストテレス全集11』、岩波書店、1968）
アリストパネス（野津寛訳）『アカルナイの人々』（『ギリシア喜劇全集1』、岩波書店、2008）
アリストパネス（久保田忠利訳）『鳥』（『ギリシア喜劇全集2』、岩波書店、2008）
アリストパネス（丹下和彦訳）『リューシストラテー』（『ギリシア喜劇全集3』、岩波書店、2009）
ウェルギリウス（小川正廣訳）『牧歌』（『牧歌／農耕詩』、京都大学出版会、2004）
エウリピデス（松本仁助訳）『オレステス』（『ギリシア悲劇IV エウリピデス下』、筑摩書房、1986）
エウリピデス（松平千秋訳）『ヘレネ』（『ギリシア悲劇IV エウリピデス下』、筑摩書房、1986）
オウィディウス（田中秀央・前田敬作訳）『転身物語』（人文書院、1966）
オウィディウス（高橋宏幸訳）『祭暦』（国文社、1994）

キケロー（山下太郎訳）『神々の本性について』（『キケロー選集 1 1』、岩波書店、2000）
クセノフォン（村治能就訳）『饗宴』（『世界人生論全集 1』、筑摩書房、1963）
プラトン（松永雄二訳）『パидン』（『プラトン全集 2』、岩波書店、1974）
プラトン（藤沢令夫訳）『パидロス』（『プラトン全集 5』、岩波書店、1974）
プラトン（河井真訳）『ヒッパルコス』（『プラトン全集 6』、岩波書店、1975）
プラトン（森進一・池田美恵・加来彰俊訳）『法律』（『プラトン全集 1 3』、岩波書店、1976）
プリニウス（中野定雄・中野里美・中野美代訳）『博物誌』（雄山閣出版、1986）
プルタルコス（田中龍山訳）『富への愛好について』（『モラリア 7』、京都大学学術出版会、2008）
プルタルコス（松本仁助訳）『邪悪な目つきで魔法をかけ、災厄をもたらすと言われている人たちについて』（『モラリア 8』、京都大学学術出版会、2012）
ヘシオドス（廣川洋一訳）『神統記』（岩波書店、1984）
ヘラクレイトス（内山勝利訳）『自然について』（『ソクラテス以前哲学者断片集 第 I 分冊』、岩波書店、1996）
ホメーロス（松平千秋訳）『イーリアス 上』（岩波書店、1992）
ホメーロス（吳茂一訳）『オデュッセイア 上』（岩波書店、1971）
ホメーロス（吳茂一訳）『オデュッセイア 下』（岩波書店、1972）
ホメーロス（沓掛良彦訳）『ホメーロスの諸神讃歌』（平凡社、1990）
ルキアノス（内田次信訳）『アナカルシスまたは体育について』（『ルキアノス選集』、国文社、1999）
ルキアノス（吳茂一訳）『にわとり』（『神々の対話』、岩波書店、1953）

参考文献

- Boardman, J., 1992, The phallos-bird in archaic and classical Greek art, *Revue Archéologique*, Nouvelle Série, Fasc. 2, pp.227-242
- Csapo, E., 1993, Deep Ambivalence: Notes on a Greek Cockfight, Part 1, *Phoenix*, Vol.47, No.1, pp.1-28
- Hoffmann, H., 1974, Hahnenkampf in Athen. Zur ikonologie einer attischen bildformel, *Revue Archéologique*, Vol.79, Fasc. 2, pp.195-220
- Johns, C., *Sex Or Symbol? Erotic Images Of Greece And Rome*, Hong Kong, 1982
- Mertens, J.R., *How To Read Greek Vases*, New York, 2010
- Vallois, R., 1922, L'<agalma> des Dionysies de Delos, *Bulletin Correspondance Hellénique*, 46, pp.94-112

ヴァルター・ブルケルト（前野佳彦訳）『ホモ・ネカーンス 古代ギリシアの犠牲儀礼と神話』
(法政大学出版局、2008)

上村くにこ『白鳥のシンボリズム』(御茶の水書房、1990)

ジャン=ピエール・ヴェルナン（及川馥・吉岡正敞訳）『眼の中の死』(法政大学出版局、1933)

エルワージ・F・T（奥西峻介訳）『邪視』(リブロポート、1992)

岡本新『ニワトリの動物学』(『アニマルサイエンス5』、東京大学出版会、2001)

加茂儀一『家畜文化史』(法政大学出版局、1973)

ロマン・ギルシュマン（岡谷公二訳）『人類の美術 古代イランの美術I』(新潮社、1966)

清水芳見、1983「邪視研究の動向」『民族学研究』48巻1号、pp.91-100

アンリ・ジャンメール（小林真紀子・福田素子・松村一男・前田寿彦訳）『ディオニューソスバッコス崇拜の歴史』(言叢社、1991)

高津春繁『ギリシア・ローマ神話辞典』(岩波書店、1960)

周藤芳幸・澤田典子『古代ギリシア遺跡事典』(東京堂出版、2004)

デンベック・H（小西正泰・渡辺清訳）『家畜のきた道』(築地書館株式会社、1979)

ドーヴァー・K・J（中務哲郎・下田立行訳）『古代ギリシアの同性愛』(青土社、2007)

三浦一郎『エーゲとギリシアの文明』(講談社、1987)

NHK「美の壺」制作班『美の壺 鶴』(日本放送出版協会、2009)

注

¹ 諸説有り。岡本新『ニワトリの動物学』、p.10 (『アニマルサイエンス5』、東京大学出版会、2001)

² ロマン・ギルシュマン（岡谷公二訳）『人類の美術 古代イランの美術I』、p.45 (新潮社、1966)

³ アリストパネス（久保田忠利訳）『鳥』、707行 (『ギリシア喜劇全集2』、岩波書店、2008)

⁴ アイソーポス（中務哲郎訳）『イソップ寓話集』、58 (岩波文庫、1999)

⁵ 岡本、2001、p.127

⁶ アリストテレス（島崎三郎訳）『動物発生論』、770a9 (『アリストテレス全集9』、岩波書店、1969) など

⁷ アリストテレス（島崎三郎訳）『動物誌』、558b10 (『アリストテレス全集7』、岩波書店、1968)

⁸ デンベック・H（小西正泰・渡辺清訳）『家畜のきた道』、p.88 (築地書館株式会社、1979)

⁹ 『ギリシア喜劇全集2』、2008、度量衡表から

¹⁰ 加茂儀一『家畜文化史』、p.935 (法政大学出版局、1973)

-
- ¹¹ 紀元前8世紀頃（ポリスの成立）～紀元前330年頃（アレクサンドロス大王による支配）とする。
- ¹² 紀元前330年頃～後395年頃（ローマ帝国の東西分裂）とする。
- ¹³ アテナイオス（柳沼重剛訳）『食卓の賢人たち』、第9巻鷄 373a-b（京都大学学術出版会、1998）
- ¹⁴ プリニウス（中野定雄・中野里美・中野美代訳）『博物誌』、第10巻71（雄山閣出版、1986）
- ¹⁵ アリストパネス、『鳥』、483-492行
- ¹⁶ プリニウス、第10巻24
- ¹⁷ ホメーロス（呉茂一訳）『オデュッセイアー 上』、第4書764、第14書428他（岩波書店、1971）
- ¹⁸ プリニウス、第10巻71
- ¹⁹ ただし、プラトン自身はこの臨終に実際には立ち会っていない。プラトン（松永雄二訳）『パイドン』、118行（『プラトン全集2』、岩波書店、1974）
- ²⁰ 紀元前264-241年。プルケルが敗北したのは249年のドレペナの海戦。
- ²¹ キケロー（山下太郎訳）『神々の本性について』、第2巻3他（『キケロー選集11』、岩波書店、2000）
- ²² プリニウス、第10巻24
- ²³ アリストパネス『鳥』、70行
- ²⁴ この語は少女にも用いられた。
- ²⁵ アリストパネス『鳥』、707行
- ²⁶ 少年愛において贈り物にする動物は鳥類に限らず、ノウサギ、キツネ、雄ジカ、ウズラ、オオバン、ガン、ウマ、イヌの他、豎琴や鞠、金錢を送る場合もあった。ドーヴァー、2007、p.158
- ²⁷ “The lover thinks that the cock he gives to a beautiful boy is a seduction gift, but at the same time it includes a coded warning not to submit, even to resist to the death the donor’s erotic intentions.” Csapo, E., 1993, Deep Ambivalence: Notes on a Greek Cockfight, Part 1, *Phoenix*, Vol.47 No.1, pp.1-28, p.27
- ²⁸ クセノフォン（村治能就訳）『饗宴』、8.21-22（『世界人生論全集1』、筑摩書房、1963）
- ²⁹ プラトン（藤沢令夫訳）『パイドロス』、240b-e（『プラトン全集5』、岩波書店、1974）
- ³⁰ アリストテレス（戸塚七郎訳）『問題集』、879b20-27（『アリストテレス全集11』、岩波書店、1968）
- ³¹ “For the ἐρώμενος, however, submission to anal penetration was projected as something decisive and final, like death or enslavement.” Csapo, 1993, p.22
- ³² アリストテレス『動物誌』、614a3
- ³³ 絵画や彫刻などで、人物の役目や特性を表す持ち物やシンボルのこと。
- ³⁴ ドーヴァー、K・J（中務哲郎・下田立行訳）『古代ギリシアの同性愛』、p.158（青土社、2007）
- ³⁵ アポロドーロス（高津春繁訳）『ギリシア神話』、第3巻12.2他（岩波書店、1953）
- ³⁶ Joan R., Mertens, *How To Read Greek Vases*, New York, 2010, p.82

-
- ³⁷ アイリアノス（松平千秋・中務哲郎訳）『ギリシア奇談集』、2.28（岩波書店、1989）
- ³⁸ プラトン（森進一・池田美恵・加来彰俊訳）『法律』、第7巻 798c（『プラトン全集13』、岩波書店、1975）
- ³⁹ “From the fourth century B.C. onwards young boys depicted in scenes of cockfighting have distinctly hermaphroditic qualities. From ca 420 B.C. some achieve still closer identification by sprouting wings and becoming Erotes.” Csapo, 1993, p.22
- ⁴⁰ Tintinabulum。ラテン語で「小さな鈴、鐘」の意。
- ⁴¹ Catherine Johns, *Sex Or Symbol? Erotic Images Of Greece And Rome*, Hong Kong, 1982, pp.67-68
- ⁴² Boardman, J., 1992, The phallos·bird in archaic and classical Greek art, *Revue Archéologique, Nouvelle Série*, Fasc. 2, p.227-242, p.234
- ⁴³ アポロドーロス、第3巻 10.7 他
- ⁴⁴ 相手はフェニキアの王女エウローペー。子はミーノース、サルペードーン、ラダマンテウス。同上、第3巻 1.1
- ⁴⁵ 相手はミュケナイ王妃アルクメーネー。子はヘーラクレース。同上、第2巻 4.5
- ⁴⁶ 上村くにこ『白鳥のシンボリズム』、p.3（御茶の水書房、1990）
- ⁴⁷ アリストテレス『動物誌』、610a1
- ⁴⁸ プリニウス、第10巻 63
- ⁴⁹ エウリピデス（松平千秋訳）『ヘレネ』、16行-17行（『ギリシア悲劇IV』、筑摩書房、1986）
- ⁵⁰ 上村くにこ、1990、p.7。アポロドーロスはゼウスとネメシスの交わりによって生まれた卵をレダが育て、ヘレネが誕生したという説も記している。アポロドーロス、第3巻 10.7
- ⁵¹ アリストテレス『動物誌』、615a31-b2
- ⁵² イタリアでは「fica（イチジク fico からくる女性器の俗語）」、日本では「女握り」などと呼ばれる。オウイディウス（高橋宏幸訳）『祭暦』、第5巻 433行（国文社、1994）。
- ⁵³ 周藤芳幸・澤田典子『古代ギリシア遺跡事典』、p.214（東京堂出版、2004）、三浦一郎編著『エーゲとギリシアの文明』、p.118（講談社、1987）
- ⁵⁴ p.14 以下参照。
- ⁵⁵ 顔を正面から描くことについてはアンリ・ジャンメール（小林真紀子・福田素子・松村一男・前田寿彦訳）『ディオニュソス バッコス崇拜の歴史』、p.4（言叢社、1991）参照。
- ⁵⁶ 清水芳見、1983『邪視研究の動向』『民族学研究』48巻1号、p.91-100、p.91
- ⁵⁷ ホメーロス（吳茂一訳）『オデュッセイア 上』、第2書 152行（岩波書店、1971）
- ⁵⁸ エウリピデス（松本仁助訳）『オレステス』、389行（『ギリシア悲劇IV エウリピデス下』筑摩書房、1986）
- ⁵⁹ 同上、481行
- ⁶⁰ 原語はβασκανίαであり、中傷、羨望、悪意、または魔法や妖術などを指す。φάεσι（(眼の)輝きで）+καίνω（殺す）から出たとされる。ギリシア語・ラテン語にはevil eye 等に相当する。

る単語はない。

61 アリストテレス『問題集』、926b20-30

62 ウェルギリウス（小川正廣訳）『牧歌』、第3歌 103-104行（『牧歌／農耕詩』、京都大学出版会、2004）

63 オウェイディウス（田中秀央・前田敬作訳）『転身物語』、第7巻 369行（人文書院、1966）

64 プリニウス、第7巻 2

65 プルタルコス（松本仁助訳）『邪悪な目つきで魔法をかけ、災厄をもたらすと言われている人たちについて』、680C（『モラリア8』、京都大学学術出版会、2012）

66 アポロドーロス、第2巻 4.2

67 ジャン＝ピエール・ヴェルナン（及川馥・吉岡正敏訳）『眼の中の死』、pp.31-32（法政大学出版局、1933）

68 プラトン（河井真訳）『ヒッパルコス』、228d-229c（『プラトン全集6』、岩波書店、1975）

69 売春宿の場所を示す印であった可能性もある。Johns, 1982, p.64

70 プルタルコス『邪悪な目つきで魔法をかけ、災厄をもたらすと言われている人たちについて』、682a

71 ジャンメール、1991、pp.233-234

72 現代の3月～4月。

73 現代の12月。

74 アリストパネス（野津寛訳）『アカルナイの人々』、241-263行（『ギリシア喜劇全集1』、岩波書店、2008）、プルタルコス（田中龍山訳）『富への愛好について』、527d（『モラリア7』、京都大学学術出版会、2008）

75 ヘラクレイトス（内山勝利訳）『自然について』、断片 15（『ソクラテス以前哲学者断片集第I分冊』、岩波書店、1996）

76 アリストパネス『アカルナイの人々』、264-279行

77 山車は修理して使いまわす場合もあった。ヴァルター・ブルケルト（前野佳彦訳）『ホモ・ネカーンス 古代ギリシアの犠牲儀礼と神話』、p.70（法政大学出版局、2008）、Vallois, R., 1922, L'*<agalma>* des Dionysies de Delos, *Bulletin Correspondance Hellénique*, 46, pp.94-112, pp.109-112

78 ヘシオドス（廣川洋一訳）『神統記』、178-197行（岩波書店、1984）

79 周藤芳幸・澤田典子、2004、p.80

80 ディオニュソスの木像が置かれていた都市。ディオニュシア祭はこの都市からアテナイへ導入された。

81 Hoffmann, H., 1974, Hahnenkampf in Athen. Zur ikonologie einer attischen bildformel, *Revue Archéologique*, Fasc. 2, pp.195-220, p.195

82 Boardman, 1992, pp.239-240

83 張型のこと。

84 アリストパネス（丹下和彦訳）『リューシストラテー』、109行（『ギリシア喜劇全集3』、岩波書店、2009）。また、158行のリューシストラテーの「皮のむけた犬の皮をむけ」という

言葉からオリストボスが革製品であったことがわかる。

85 ギリシア神話に登場する女性。オルフェウス讃歌などではバウボとも呼ばれる。女神デメテルが娘ペルセポネの失踪を嘆き、食べ物を口にしようとしているを見て、しきりに冗談を言い彼女を笑わせた。沓掛良彦訳『ホメーロスの諸神讃歌』、202-203行（平凡社、1990）。「冗談を言った」というのは控えめな表現であり、実際は服をまくって女性器を見せたという。

86 Johns, 1982, p.72

87 プリニウス、第30巻43

88 プリニウス、第30巻49

89 同上。

90 プリニウス、第29巻25

91 プリニウス、第10巻24

92 クセノフォン、4.9

93 高津春繁『ギリシア・ローマ神話辞典』、プリアポスの項（岩波書店、1960）

94 アリストテレス『動物誌』、558b10-12

95 同上、637b8-9

96 アリストテレス『動物発生論』、749b1-22

97 ルキアノス（内田次信訳）『アナカルシスまたは体育について』、37（『ルキアノス選集』、国文社、1999）

98 この名前（Αλεκτρυών）はギリシア語でオンドリを意味する。

99 ルキアノス（吳茂一訳）『にわとり』、3（『神々の対話』、岩波書店 1953）

100 アポロドーロス、第1巻3.3

101 「或る鳥はとさかがあり、これは羽でできた突起（羽冠）のこともあるが、ニワトリの雄の（肉冠）だけは独特で、肉ではないし、肉とあまりかけはなれたものでもない。」アリストテレス『動物誌』、504b9-11。実際は皮膚の発達した器官である。岡本、2001、pp.34-35

102 アリストパネス『鳥』、291行

103 同上、757-759行

104 岡本、2001、p.5

105 アリストテレス『動物誌』、631b28-30

106 Csapo, 1993, p.9

107 同上、pp.16-17

108 アリストテレス『動物誌』、536a31

109 同上、631b9。こうした一連の行動は恐らく現代で「peck order つつき順位」と呼ばれるものの一端であろう。岡本、2001、p.24

110 アリストテレス『動物誌』、631b11

111 同上、614a1

112 ルキアノスの『にわとり』ではオンドリの縁起譚となっている。

113 ホメーロス（松平千秋訳）『イーリアス』、第4歌 459行、507行他（岩波書店、1992）

114 アポロドーロス、第3巻5.3

115 ハデスがペルセフォネにザクロの粒を食べさせたため、ペルセフォネは毎年3分の1を冥府で過ごさねばならなくなった。同上、第1巻5.3

116 同上、第3巻10.3

117 NHK「美の壺」制作班『美の壺 鶴』、p.58（日本放送出版協会、2009）

図像



図 1



図 2



図 3



図 4

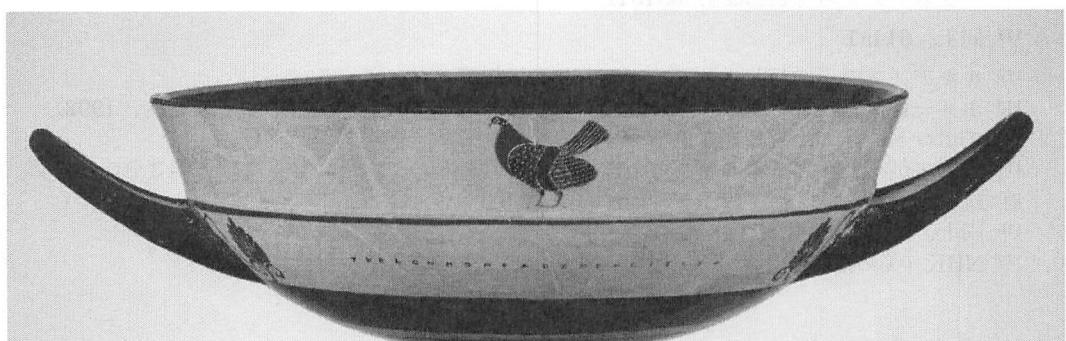


図 5



図 6

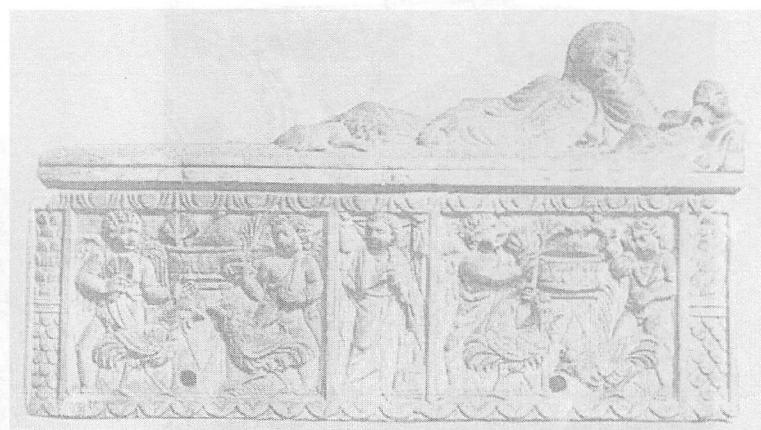


図 7



図 8 a, b

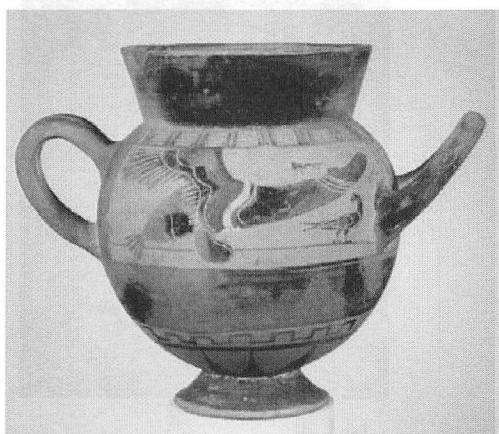


図 9 a, b

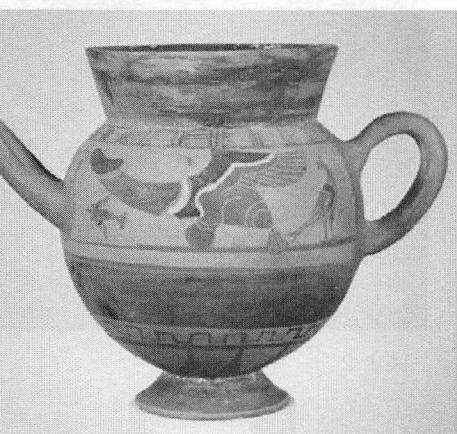




図 1 0

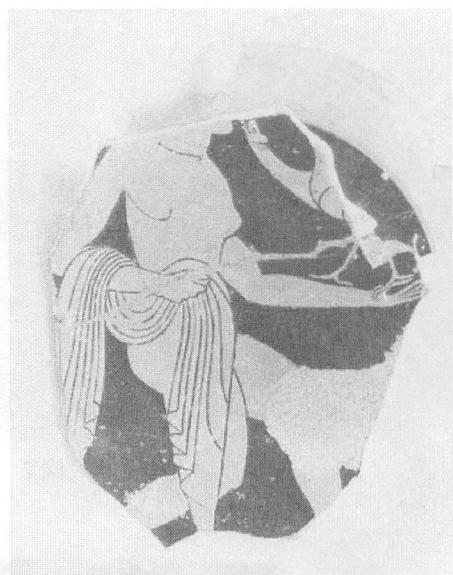


図 1 1

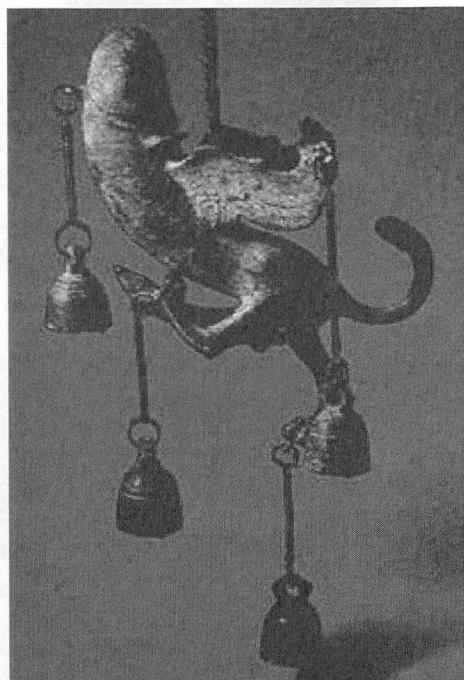


図 1 2



図 1 3

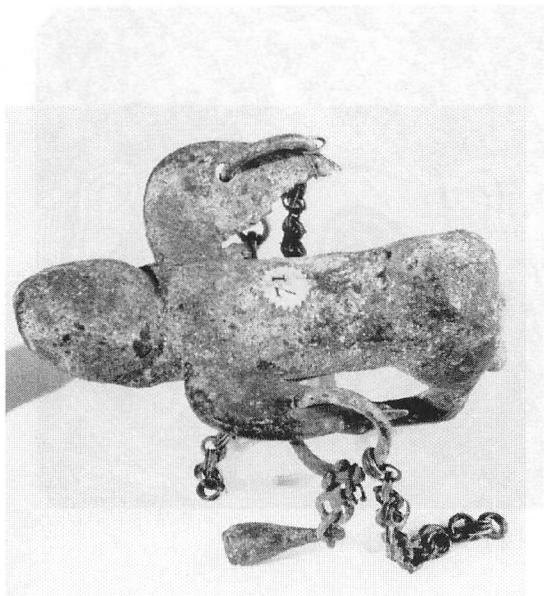


図 1 4



図 1 5

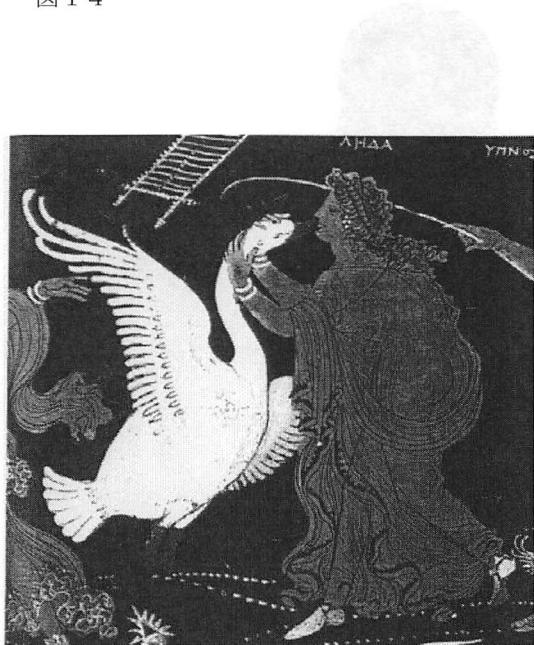


図 1 6

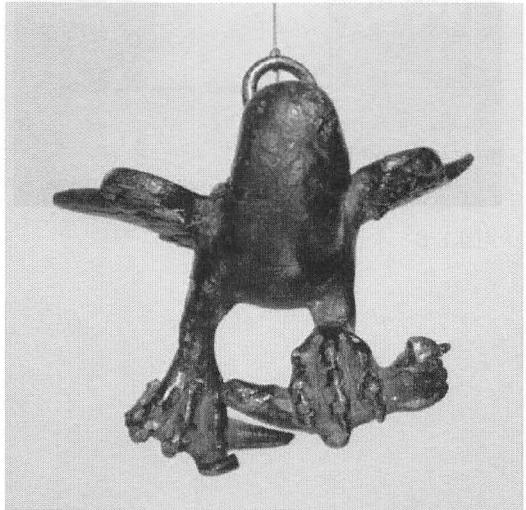


図 1 7

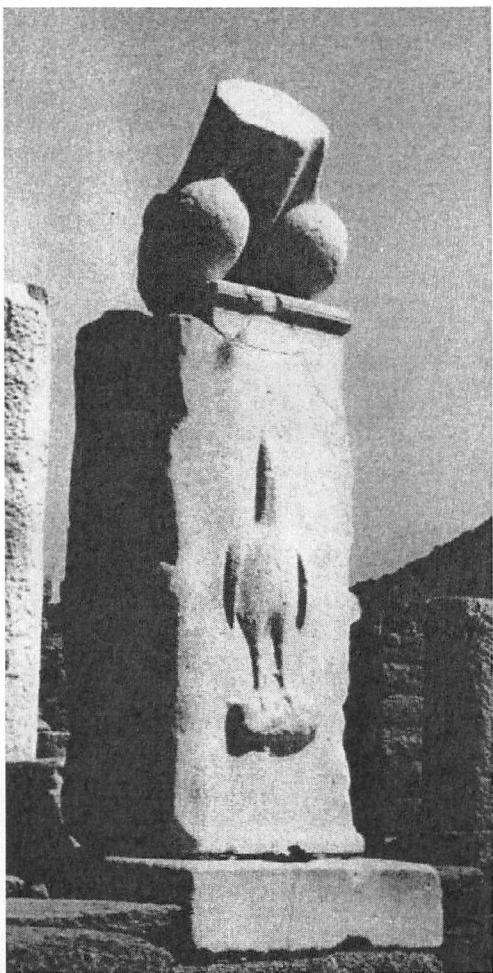


図 1 8



図 1 9

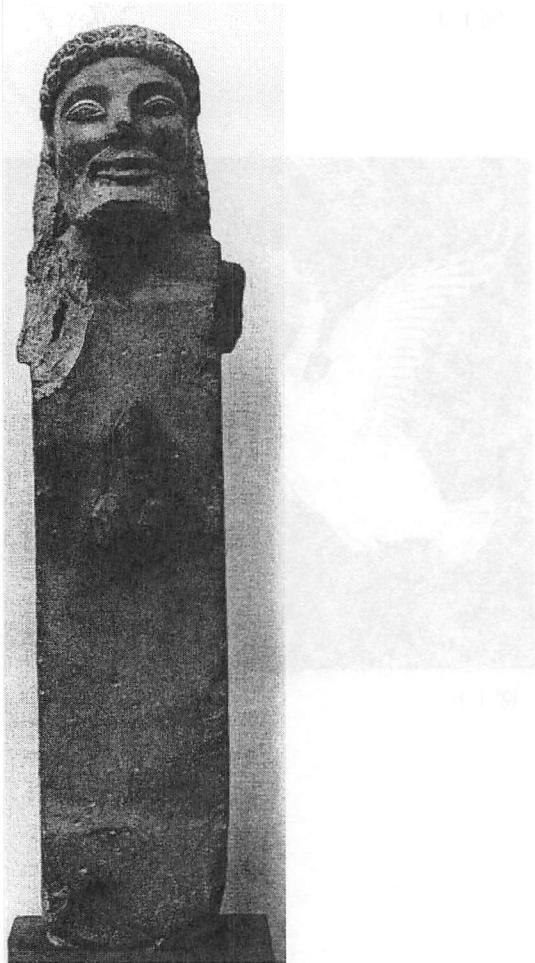


図 2 0

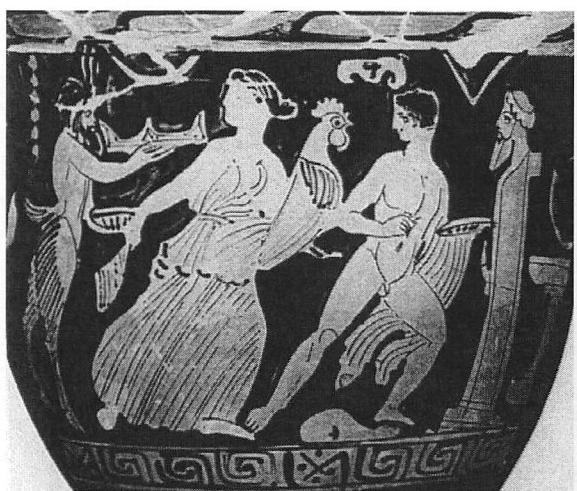


図21



図22



図23

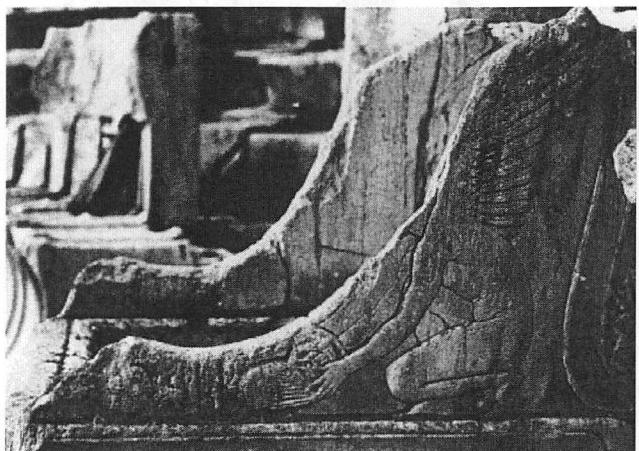


図24

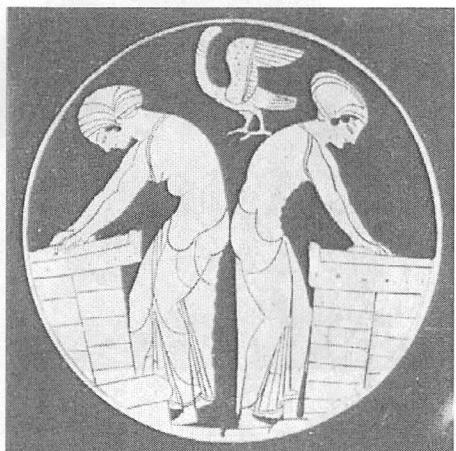


図25



図 2.6



図 2.7



図 2.8

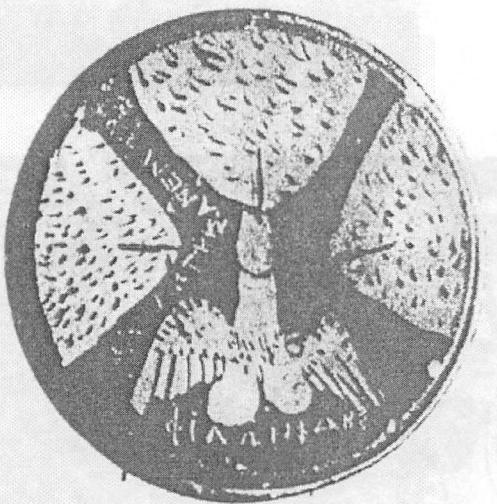


図 2.9



図30



図31



図32



図33

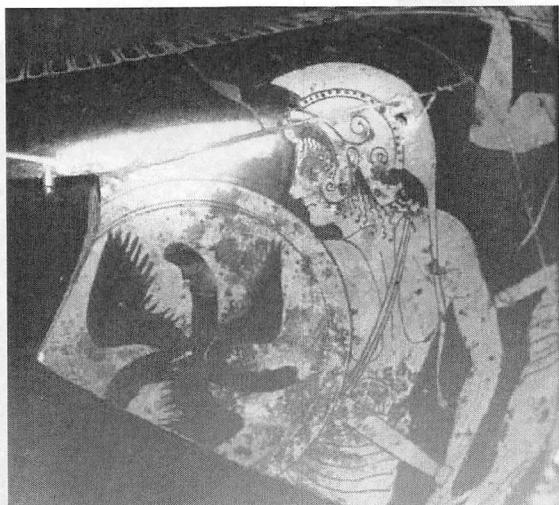


図3.4



図3.5

図像リスト

番号	出典	年代	形態
図1	Museum of Fine Arts, Boston, 03.796	前425-420	クラテール
図2	LIMC, Zeus/Jupiter 479		
図3	LIMC, Ganymedes 22	前480-470	アンフォラ
図4	LIMC, Hermes 866	前450	アッティカ式瓶
図5	Metropolitan Museum, Terracotta kylix: lip-cup (drinkingcup)	前540	キュリクス
図6	LIMC, Eros 749	前420	ピュクシス
図7	LIMC, Amor, Cupid 236	後1-2世紀	石棺
図8a	Museum of Fine Arts, Boston, 08.31c	前470	スキュフォス
図8b			
図9a			
図9b	Metropolitan Museum, Terracotta globular cup with two handles	前6世紀	スキュフォス
図10	Artstor, Greek: Erotica Phallus Bird	Greek	
図11	Boardman, J., 1992, The phallos-bird in archaic and classical Greek art, Revue Archéologique, Nouvelle Série, Fasc. 2, Catalog 5	前520-510	
図12	Artstor, Tintinnabula: (I)The Lion (II)Mouse & Tortoise	前1-後1世紀	テインティナブラム
図13	Artstor, Two tintinnabula with ithyphallic figures and phallus with bells	後1世紀	テインティナブラム
図14	British Museum, tintinabulum, 1865.1118.209		テインティナブラム
図15	British Museum, cast, WITT.210	Roman	鋳型
図16	LIMC, Leda 17	前320-300	ルトロフォロス
図17	British Museum, tintinabulum, 1824.0432.2		テインティナブラム
図18	Edward Lucie-Smith, Eroticism in Western Art, New York, 1816, 2 Phallic altar of Dionysus, Delos	前300年頃	
図19	LIMC, Gorgo, Gorgones 42	前6世紀	
図20	LIMC, Hermes 12	前490	ヘルメス柱像
図21	LIMC, Hermes 131 bis	前430-420	クラテール
図22	LIMC, Dionysos 405	前520	キュリクス
図23	アンリ・ジャンメール(小林真紀子他訳)『ディオニューソス バッコス崇拜の歴史』、メイ・ポールの図(言叢社、1991)		
図24	LIMC, Agon 8	前325	司祭の玉座
図25	Classical Art Research Centre, 5119	前500	キュリクス
図26	Petit Palais, Amphore de type C (CVA 307)	前500-475	アンフォラ
図27	ドーヴァー, K・J(中務哲郎・下田立行訳) 『古代ギリシアの同性愛』、R1071(青土社、2007)		ペリケ
図28	LIMC, Baubo 2	前197	
図29	Boardman, J., 1992, The phallos-bird in archaic and classical Greek art, Revue Archéologique, Nouvelle Série, Fasc. 2, Catalog 9	前5世紀	ピュクシス
図30	LIMC, Priapos 100		テインティナブラム
図31	LIMC, Priapos 90	前2世紀	石棺
図32	British Museum, tintinabulum, 1814.0704.415	後1世紀	テインティナブラム
図33	LIMC, Aias I 46		アンフォラ
図34	Classical Art Research Centre, 200119	前550-500	クラテール
図35	LIMC, Hades 58		

図版出典

ARTSTOR <http://www.artstor.org/index.shtml>

British Museum Collection Online

http://www.britishmuseum.org/research/collection_online/search.aspx

CLASSICAL ART RESEARCH CENTRE <http://www.beazley.ox.ac.uk/index.htm>

Hans Christoph Ackermann, Lexicon Iconographicum Mythologiae Classicae (LIMC), Zurich, 1981

Museum of Fine Arts Boston <http://www.mfa.org/collections>

Petit Palais

<http://a80-musees.apps.paris.fr/Portail/Site/Typo3.asp?lang=FR&id=accueil>

THE METROPOLITAN MUSEUM OF ART <http://www.metmuseum.org/>

青柳正規監修『世界遺産ポンペイ展』(朝日新聞社、2001)

アンリ・ジャンメール(小林真紀子・福田素子・松村一男・前田寿彦訳)『ディオニューソス バッコス崇拜の歴史』(言叢社、1991)

ドーヴァー・K・J(中務哲郎・下田立行訳)『古代ギリシアの同性愛』(青土社、2007)

マイケル・グラント(書籍情報社編集部訳)『ローマ・愛の技法』(書籍情報社、1997)